

社会情報調査の方法に関する研究会 第6回 (1995年12月16日実施)

## オウム報道の構図とその問題点

——メディアの権力性をめぐって——

松田 博公

1. 「もっとよいメディア」論への疑問
2. 「力の平行四辺形」の原理の衝撃
3. オウム真理教報道の現実を前にして
4. 明治期日本における淫祠邪教バッシングの構図
5. マスコミによる天理教批判とオウム真理教批判の類似性
6. ワイドショーのキャンペーン番組の問題点
7. ジャーナリズムにおける「隠す機能」という重要問題
8. 「死に直面せよ」と説き続けた麻原の鋭い一面
9. 問題にされない今の社会のマインドコントロール
10. 破防法適用をめぐる議論の不可解さ
11. ヴァジラヤーナの教義と「ポア」
12. 犯罪を個人の資質に還元して理解する方法の誤り

### 1. 「もっとよいメディア」論への疑問

初めまして松田と申します。今日はお招きいただきましてどうもありがとうございます。社会情報学の方法を研究されておられる研究会にお招きいただき、本当に嬉しいなと思っています。僕自身は25~6年も新聞記者をやって参りましたが、特に大学でジャーナリズム論を専攻したわけでもありません。ただ、学生時代に学生新聞を編集しておりまして、その過程で新聞の批判的な分析といいますか、特に当時、僕ら商業新聞との対抗軸において学生新聞を編集するというようなスタンスを執っていたんですから、商業メディア批判ということをかなり考えた時期がありました。その関係で社会の認識だとか分析の方法ということに関心を持続的に持っていたわけです。そういうことで僕自身も特に

アカデミックな勉強をしたわけではなかったんですけども、その後の自分の個人的な関心に任せて認識の方法だとか哲学分野にはちょっと関心を持っていたものですから、今度、井上さんからこうした場へのお招き受けたときには、とても嬉しかったですね。

僕は、今年3月のオウム真理教の強制捜査の時期から8月まで事件の取材に関わって参りました。ジャーナリズムに対して批判的な所感、コメントを行って参りましたが、オウム真理教に関わること無しには、たぶんそれはやって来なかっただと思ってるんです。学生時代に商業メディアに関して批判的な分析をしていたものの、それ以降チャンスがなかったということがありますけれども、職業として新聞記者を選びながら、批判的な分析やコメントをするっていうことはなかったわけです。それが今回、発言するようになった

のは何故なのかということを最初にちょっと述べておきたいわけです。

今、わが国のジャーナリズムの世界で、ジャーナリズムの限界だとか、報道の問題点を指摘したり、探ったりする流れは極めて少ないんです。しかし、少ないながらも存在してはいます。この流れは、諸外国の例をとっても解りますように、本来もっと深くきっちりと定着していなければいけないものなんですけれども、まあ、残念ながら日本ではそう大きな潮流にはなっていない。しかし、いわゆる人権報道という視点であるとか、或いは犯罪報道において被疑者、つまり犯人と目されて逮捕された人物については匿名報道すべきであるというような主張は、ここ10年来展開されてきているわけです。

実は僕自身の立場っていいますか、マスメディアに対する批判の立場、20数年前に学生時代にある種の認識を持った時以来のものなんですけれども、それはこの人権報道のスタンスとは少し違うんです。それは僕自身が長い期間のあいだジャーナリズム批判をやって来なかつたことともつながってきます。どうしたことかっていいますと、僕は、人権報道或いは匿名報道主義を主張する立場というのは、一つの商業の論理だと思っているんです。それは、より良い新聞を作っていく、より被害の少ないメディアを作っていくという視点からの批判である。或いは被疑者と目された人物の人権をいかに擁護していくか、という視点からの批判であるということですね。それはメディアとしていかに存続していくか、この社会の装置の一つとしてのメディアをいかに有効に機能させていくか、という発想だと考えられるのです。

僕自身はちょっと違う発想をずっと持っているんです。それは例えば教育に関しても同じなんです。少し教育記者をやった時期がありまして、その時以来考えていることなんですけれども、教育に関しても同じようなタイ

プの思想っていいますか、「いじめ」の問題ですとか、様々な教育現象に切り込んでいく場合に、多くの立場というものは「もっと良い教育はないか」、「もっと良い教育実践はないか」というスタンスをとっているんですね。それと同じで「もっと良いメディアが存在するんじゃないかな」というスタンスからメディアを改善していく発想がみられる。

僕自身はそういう批判の役割の重要性というものをもちろん認めているわけです。それは確かに必要である。ただ、僕自身はちょっと違ったところに立ちたいと思っているんです。どういうことかっていいますと、例えば犯罪報道で、一人の犯罪者の人権を守ろうとするその立場からですね、匿名の報道を主張するという発想が生まれてくるんですけれども、それでいいんだろうか。それがその犯罪そのものを解明する方法なんだろうかということに疑問を持っているわけですね。

## 2. 「力の平行四辺形」の原理の衝撃

ちょっと最初に述べておきたいなと思ったのは、僕が初めて社会の認識、それはマスメディアも含めて或いは学校教育であるとか文化の装置であるとか様々なものも含めて、この社会の動きを解明する認識の方法のヒントをエンゲルスという人から与えられたわけなんですね。当時、その理論に触れたときには本当に「眼から鱗が落ちた」ような気がしたんです。エンゲルスは「力の平行四辺形」の原理というのを提出しています。どういうことかと言いますと、まずこの社会のあらゆる現象というものは誰もが自分の思うように動かし得ていないということなんです。

例えばAならAという力の働きが存在する。そしてまた別のBならBという力の働きが存在する。そうすると現実というのはAという力の働きとBという力の働き、それぞれが平行四辺形のそれぞれの辺であるとするならば、そのAという辺とBという辺との間の

対角線に現実は動いている。さらに現実というものは単にAという力あるいはBという力というたった二つの力だけが動いている訳ではない。

エンゲルス、それにもちろん皆さんよくご存じのマルクスという人がいますが、この二人はマルクス主義という理論体系を作り上げたわけです。そのマルクス主義における社会認識の方法は基本的には世界を二つの階級として、ブルジョアジーとプロレタリアートという二つの階級の対立から説明します。その他の中間的な階級も存在するけれども、基本的にはその二つに還元できるだろうという単純な認識を持っている。というより図式化されているわけなんですけれども、現実にエンゲルスの言っていることを、もっと細かく見ていくとそれほど単純ではなかったんですね。僕はそれで「眼から鱗が落ちる」という感じがしたんです。それはどういうことかといいますと、現実というのは単にAの辺とBの辺があるだけではなくて、A A' A'' A''' ……という無数の辺があり、さらにBの場合にもまた、無数の辺がある。そして無数の辺と無数の辺がさらに無数の平行四辺形を作りだして、その対角線にまた、無数の現実がある。最終的には無数の平行四辺形の対角線から一つの平行四辺形の対角線が合成されて、それが現実なんだ、ということを言っていたわけですね。

ちょうど僕がその発想を知ったのが1960年代の末でありまして、ベトナム戦争があり、大学においては全共闘運動が起こっていた時期でした。たぶん僕はその認識を得ることによって、現実をもっと複雑に見なきゃいけないんだという発想を得たんだと思うんです。全共闘運動という一つの変革の運動が、例えば今回のオウム真理教事件とつながるエポックメーリングな事件と一部で言われているところの連合赤軍事件に流れ込んでいくのですが、その時に全共闘運動がどこか間違ってる

んじゃないかなと僕が言えた一つの根拠でもあったんですね。

現実というものは無数の力によって作り出されているのであって、現実を認識する際にはその無数の力の動きというものを、それがどう絡み合っているかということを捉えなければいけないんだよ、ということを僕は教えられた気がしたわけです。例えば先日、死んだフランスの哲学者でドゥルーズという人がいます。彼はガタリというイタリア出身の精神分析医と共に仕事をしていまして、ドゥルーズ=ガタリという通名でよく知られている人ですが、今、述べたのと同じような現実の認識の仕方としてリゾームという概念を彼らが提出しています。これを僕はエンゲルスの力の平行四辺形をさらにもっと複雑に、しなやかなものにしていったものではないかというように実は理解しているんです。

リゾームというのは、まるで脳の中の神経細胞が、相互に連関を持っているかのようにこの現実というものを見直してみると、人は単に敵と味方だと国家と国家的権力と或いは権力を持たない非権力の存在であるとか、或いは差別するものと差別されるものだとかというような、そういう単純な二項対立ではない、別の視点でこの社会を捉えることが可能であるとする概念です。いわば様々な力の攻め合いでその隙間を縫うような形でものを考えようとする立場です。もっと人を差別しない、或いは権力的に人を蹂躪しない、ファシスト的に関わらないということであり、例えば、男と女の間においてももっと対等な関係を作り上げていく感性を持つてるとかっていうようなことです。ドゥルーズ=ガタリはそう言いたかったんじゃないかなと思うんです。

そういう発想につながるような思考の方法を僕はかつて得たような気がした。そのような立場に立ちますと、例えば一人の犯罪者の報道において単に彼の人権が守られるか守ら

れないとこと以上に、ジャーナリズムにおいて目的として考えなければいけないことは、その犯罪なら犯罪が何故その人間によって担われる形で発生してきたのかということを、まさにその複雑な構造を複雑な構造のままにいかに取り出しうるかということだろうと思ったわけなんですね。

ですから僕は人権を守る、あるいは人権をもっと推進するという或る種のハードな、つまり人権が侵されているのは現実ですから、あるいは差別があるのは現実ですから、それを激しく押し返していくというような主張でジャーナリズムを批判するという立場に対しては、一線を画してきたわけなんです。ところが今年になってすさまじい形で展開されているオウム真理教報道を前にして、やっぱり黙っていられなくなってしまったんですね。

### 3. オウム真理教報道の現実を前にして

これまでのあらゆる立場から距離をとるというスタンスの取り方は、取り方としてとておくとしても、この報道の仕方は余りにもひどいんじゃないかというように思えてきました。といいますのは僕は3,4年ぐらい前から宗教の報道に関わってきました。共同通信には一人も宗教記者がいない。宗教というものが文明の装置としても大きな役割を果たしているにも関わらず、それを専門に分析したり、報道したりする記者が一人もいないというそんな馬鹿なことがあるのかということを、その前頃から言い出してはいたんですけども、企業体の中ではなかなかそれが受け入れられなくて、じゃあもう自分でやろうかっていうことで、ぼちぼちと始めていたわけなんです。そういうこともあって自分なりの宗教に対する見方っていうものを持とうとしていたときにですね、このオウム真理教事件があり、そしてそれに関して図式

化したような報道が行われるに至ったわけですね。

私の眼から見ますと、この報道を扱っている新聞、テレビ、雑誌。これらは厳密には少しずつ違うんですけれども、まあ特にすぐさま私たちの眼につくのは、テレビのニュースキャスターの人たちであるとか、ワイドショーのキャスターたちですね。こうした人達のあまりにすさまじい宗教に対する無知というものが、まず、眼についたし、さらに新聞ジャーナリズムにおいては、そこで展開されている情報っていうのはほとんど全てといついい程、捜査官からリークされた裏情報なんですね。一切記者会見で公表されることは捜査情報の場合はないわけです。

捜査情報の公開は諸外国においてはあるんですけども、日本の場合には捜査の過程において正式な記者会見が開かれて、そこで捜査情報が公開されることはありません。じゃあどういう形で新聞記者は刑事事件の記事を書くかというと、夜討ち朝駆けといって捜査官の自宅を訪れ、捜査官が帰ってくるまで玄関先で何時間も立ち続けてようやく帰ってきた捜査官を捕まえて立ち話ををして、情報を得るというような手法ですね。そのような手法を通じて入手した非公式の情報、つまりこれは決して公式の情報ではない、裏情報なわけです。それを紙面に書くという報道の仕方で紙面が埋められているわけですね。

しかもそのリーク情報は、子細にいろんな新聞を読み比べてみると良く分かるんです。明らかにオウム事件においては警視庁、および各警察は新聞社に対して、例えば、今日は朝日新聞、だから明日は毎日新聞、その次は読売新聞というような形で順繰りに平等に情報を配分しているということがよく見えてくるわけですね。ですからいわゆるリーク情報の特ダネというのは、順繰りに出てくる。そしてまた各社が捜査官の自宅を訪れて、例えば「昨日、朝日に出てたあの情報は本当なん

ですか」とたずねて「いやー、あれは本当なんだよ」と言わせて、言質をとって追いかけるという形で記事が作られてきます。そういう報道合戦といいますか、別の言葉でいえば完全に警察の情報操作に乗った上での報道が現実に行われてきたわけですね。こここのところ、やや状況が変わってきていますけれども、3月22日の強制捜査以来3、4ヶ月の間そのような事態が展開したわけです。

僕は今年、日本の新聞ジャーナリズムは2度死んだという見解を持っているんです。一度はオウム真理教事件の報道において、もう一度はあのWindows'95の報道においてです。(笑) あれを見たときも僕は日本の新聞は死んだんじゃないかとつくづく思ったんです。あのWindows'95の一件は、あまりにも酷いですよね。みなさんの中にも感づいた方がおられると思うんですけども、えーまあ、これは時間の関係もあって今回は深くは語りませんが、何百億円も使ったその宣伝費に乗っかって、ただマイクロソフト社という一つのソフト会社のPRをあらゆるメディアが一挙に洪水のように行なったという現象が現実について最近あったんですね。

確かにWindowsの前の版よりはWindows'95は非常に改善された使いやすいソフトかもしれない。けれども、それがコンピュータの歴史を変える革命的なソフトであるかといえばそんなことは全然ありません。まだまだマッキントッシュの方が使いやすいのは事実であるし、日本のジャーナリストは大変なデマゴギーの役目を果たしたわけですけれども、まあそういう意味において今年は新聞ジャーナリズムのあるいはもちろんテレビも含めて大変な年だったなあというように思っているんです。

#### 4. 明治期日本における淫祠邪教バッシングの構図

それで宗教を少しカジリはじめた僕の眼から見ると、日本のジャーナリスト達は余りにも宗教について知らないんじゃないかというように考えたことを、少し具体的な事実としてお話していきたいと思います。話を簡単にするために、先程、狩野先生からもコメントがございましたけれども、これまでの日本の歴史においていわゆる宗教団体とマスメディア、ジャーナリズムの関係はどうだったのかということを少し探ってみることにしたいと思います。

日本のジャーナリズムは、明治維新以降の近代化の過程の中で各地方に無数の新聞がまさに雨後の竹の子のごとく立ち上がって来るっていうことから始ましたんですけども、その中で販売政策の問題が非常に大きかったんですね。それで淫祠邪教バッシングというものを徹底的に行なっているのです。この経緯については少し説明が必要でしょう。

明治政府は富国強兵政策を進めるために様々な政策を展開しました。国民の意識を統合するという意味で国家神道を構造化、構築していくということもあったわけです。神道はかつていわゆる原始神道の時代以来、非常にゆるやかなものであって、様々な他の宗教と習合してきたわけです。とりわけ仏教と大きく習合していまして、日本の神道というものは神仏混融の現象抜きにはとても語りえないような状況があります。

今でこそ神社のなかにお寺があるという現象は少ないんですけども、例えば伊勢神宮自体のなかにも昔はお寺がいっぱいあって、今のような伊勢神宮はずいぶん最近になってからあの景観が作り出された。非常に人工的に作りだされたわけですね。伊勢神宮が今のように管理されていなかった頃には境内に神社仏閣が沢山あって、お坊さん、あるいは山

伏、あるいは尼さんというような人達が無数に徘徊していたのですね。例えば、このことを示す資料として伊勢神宮曼陀羅という絵図があります。それを見るとはっきりとそれが分かります。ましてや他の神社にもほとんどその境内の中にお寺があった。明治になってはっきりと神仏分離が行われて、天皇制を裏付けていく。つまり天皇を頂点とする一つの新たに作り上げられた新興宗教としての国家神道ですね。それが形成される中でそれ以外の民間信仰が管理され、あるいは潰されていった。そのような動きが一つあります。

こうした状況と当時、国内の各地で立ち上がりてくる小さなミニ新聞の経営戦略が結びついて、淫祠邪教バッシングが成立します。すなわち、それらの新聞が当時の新宗教、今までいうならば新興宗教ないし新々宗教と分類される民衆神道っていいますか、民衆宗教を批判のターゲットにしていくんですね。一番最初にターゲットになったのが蓮門教という教団です。これは当時、非常に大きな勢力をもって教勢拡大を図っていた。にもかかわらず『万朝報』という黒岩涙香という作家が主筆を努めていた新聞のキャンペーンによって見事に潰されています。

僕自身がちょっと調べてみたのは天理教なんです。天理教もすでに教祖の中山みき、これは非常にシャーマニスティックな女性だったんですけども、その彼女の生存中に既に地域の奈良県の警察から様々な理由で攻撃されたり、あるいは留置されたりするという形での弾圧を受けていたんです。しかし、大衆新聞が登場してくると、そういうみき個人に対する拘置、逮捕っていうようなレベルではなくて、キャンペーンによって大衆的に天理教の「罪悪」「邪悪な面」というものが暴かれるというような構図になっていったわけですね。

## 5. マスコミによる天理教批判とオウム真理教批判の類似性

その事情をちょっと追ってみました。皆さんのお手元に最近、私が書きました文章「天理教と中山みき私有財産を否定した危険思想?」(『異端の教団』【洋泉社】)が資料として配付していますので、内容については詳しくは後でそれを見てください。今日はそのことと今起きているオウム真理教の報道の関係を構造的に見てみたいんです。このキャンペーンには幾つかの要素があります。

例えば、この資料の最初の方にありますね。明治政府の内務省が全国の都道府県に天理教を制圧しろという訓令を出しているんです。その訓令の中に「近来天理教ノ信徒ヲ一堂ニ集メ、男女混淆動モスレバ、スナワチ風俗ヲミダルノ所為ニ出デ、或イハ神水神符ヲ付与シテ愚昧ヲ狂惑シ、遂ニ医薬ヲ廢セシメ、若シクハミダリニ寄付ヲ為サシメル等、ソノ弊害漸次蔓延ノ傾向コレアリ、コレヲ今日ニ制圧スルハ最モ必要ノ事ニ候」とあるわけです。つまり、一つは男女が混淆してともすれば風俗を乱しているんだということです。いわばエロティックな面に眼を付けたといいますか、セックススキャンダルと言いましょうか、まあそういうような視点で一つの宗教活動を見るということですね。もう一つはいわゆるインチキ治療とでもいいますか、神水神符を付与して愚昧を狂惑し、遂に医薬を廃せしめっていうことはインチキな根拠のない治療を行っているということですね。それからもう一つは、みだりに寄付を為さしめているっていうことであって、つまりこれは財産を収奪しているということでしょうか。

まとめて言うと、ここにおける天理教批判というのは例えばオウム真理教批判のテーマと似ているわけです。オウム教の場合は「极限の布施」っていうことで信者からテレホンカード一枚までも巻き上げるというようなこ

とを徹底的にやっていた。これが資料に言う財産の収奪というのに該当するわけです。そういう批判の側面があります。もう一つはオウム真理教であれば、いわゆる古典的なヨガに立脚しているわけですから、それでもってアレルギーが治るというような触れ込みで塩水を飲んでそれを吐くということをやっている点です。あと温熱修行、温熱治療。これらは修行というよりも最初は治療の方法としてもっとマイルドなものとしてあったはずなんですが、熱いお湯に入り、体を冷やしてまた入るということを交互にやっていく。或いは鼻ヒモを鼻の穴から入れてそれを口から出してそれでもって鼻のなかを掃除するという治療方法です。それは実はヨガの古典的な手法であって、当たり前の修行なんです。

それがテレビの画面で報道される際には、まるで奇妙なインチキ療法をやっているというキャンペーンの一環として使われていくわけですね。それと同じようにインチキ治療批判っていうのが天理教の場合には特に当時、天理教自身が病気を治すということを大きな触れ込みにしていたということもありました。それがマスコミによって一つの批判の眼目になっていったわけです。

それから、スポーツ紙を、僕はもうあれ以来毎日買うようになってしまったんです。それ以前は一紙も買ったことがなかったのに。というのはスポーツ紙には連日のごとく麻原教祖と麻原教祖を取り巻く幹部の女性あるいは十代の女性たちで麻原教祖係の集団を作り上げていたというようなセックススキャンダルが書き立てられていたからです。天理教の場合にもそれとまさにパラレルなことがあります。天理教の場合には「陽気ぐらし」を推奨していくて、男と女が一堂に会してみんなで陽気に神様への感謝を込めて笛や鐘や太鼓を使って踊るという儀式をやるのですが、これが「男女7歳にして席を同じにする

なけれ」という明治政府の望んだ儒教的な倫理に真っ向から対立するということも大きな要素としてあったのでしょう。それがまるでセックススキャンダルであるかのように天理教の場合にも語られて批判の大きな要素になったわけですね。

要するに天理教の場合はかなり冤罪の要素が強いということです。男女が集まって踊ったからといって決してそれ自体がセックススキャンダルとして騒がれるような実態は何もなかっただろうし、あるいは神水を使った治療にしても、一定の効果は今の時代より当時はあったのかもしれない。また、財産を全て召しあげるという行為、実はこれに関しては資料の文章をお読みいただきたいんですけども、天理教においてはその宗教活動の根幹にあらゆる財産を投げ出すという行為が立ち上がりのときにはあったんですね。

中山みきという一人の非常に苦労していた主婦に神が降りたときに、みきの家は庄屋を継ぐ代々の名家で、ある程度の財産があったんですけども、降りてきた神は「あらゆる財産を投げ捨てよ」とみきに教えたわけですね。彼女はそれにそのまま従おうとしたわけです。当然、家族は抵抗したわけですね。そこで厳しい家族の中での軋轢もありながら彼女は、家財産を全て貧農に分け与えるということを次々にやっていくわけです。それを完璧にやり遂げて彼女はある種の狂気的な神がかかりの状態から段々と落ち着いていくわけです。そこにどういう心理的な問題があったのかは具体的にはよく分かりません。ただおそらく奈良の農村地帯の庄屋と庄屋に使われる小作人という、その厳しい階級的な対立関係のなかにあって、みきは何か大きな良心の咎めみたいなものを持っていたのかもしれないですね。自らは苦労している主婦であると言いながら、階級的には上の立場にあってある種の地位や財産を有した生活をしている。しかし、自分の身の回りの農民たちは毎

日来る日も来る日も、厳しい労働に耐えながらしかし、その作物のかなりの部分をそれより上の階級の人間に収奪されていく。そこに彼らの苦しみがあるんだということを、みきはおそらく意識の奥深く身体を通じて知っていたのでしょう。だからこそ、みきに対する神がかりはその身体の現象として現れてくるわけですね。

まず最初は体の変調、非常に病気がちになっていくということをもって始まり、そのみきに神が降り、みきは神のその教えに従っていくことによって、体調を回復していくのですけれども、たぶん財産問題を巡ってもある種の良心の呵責というものをみきは持っていたんじゃないかと思われるわけですね。ですからまさにゼロになり切る、あらゆる財産を投げ捨ててゼロになり切るというのは、みき個人の身体の回復でもあったし、魂の救済でもあった。そしてそれは普遍性を持つものだとたぶんみきは考えた。それで布教ということを始めていったのでしょう。そこにこそ、まさに天理教の出発点があったわけです。

ですから、その後で天理教の教団が形成される中で幹部たちが中山みきの行動をどの様に模倣していったのか、純粹に模倣したのか、或いは教団を成立させるためにまるでまさしくオウム真理教のように、その教義を口実により貧しい人達から全財産を没収する道に入っていたのか、それはわかりません。その点についてはもっとキッチリとした事実の突きつめ方が必要なんでしょう。僕自身はそこまではやっていないんですけども……。

いずれにせよ天理教の場合にはかなり本格的な教義と結びついた所で、財産の寄進の問題があって、それに対して明治政府がそのような批判の眼差しを注ぐということは多分あった。当時すでに無政府主義という潮流が日本にもありましたし、明治政府はスタートの時期から私有財産制ということをはっきりと意識していました。たぶんそういう観点か

らも危険思想として天理教を叩いたんだろうと思いますね。いささか説明が長くなってしまいますけれども、そういうように天理教の場合には、かなり冤罪としてみられた要素があります。

いろいろと面白い批判の仕方が当時のジャーナリズムによって行われていて、例えば、天理教では布教する場合にコンペイトウを配るということがあった様なんですね。あの甘い、砂糖の固まりのようなお菓子ですけれども「コンペイトウに実は麻薬が仕掛けあって、それを食べることによって信者の意識がモウロウとして、そして神がかかったんだ」というようなキャンペーンが張られたこともある。まさに現在のオウム真理教の薬物使用、LSDだとか自ら開発した麻薬を彷彿させる例です。

その他これは極めて稀にですが、天理教も初期の頃に信者が死ぬというケースがありました。いささか狂信的になった信者がいたんでしょう。他の信者に対して「おまえの体に邪惡な神が付いているから」といって、彼の体を切ったことがあります。まあ、切るということで邪惡なものを出すということをしたんでしょう。そのことで出血多量で一人の信者さんが死んだことがありました。それでもって天理教は殺人教団だと言われたわけですね。それもこの時期の天理教批判の一つの要素であったわけなんですね。だからといって天理教がオウム真理教のように無差別殺人を企てたということでも勿論ないし、そのような殺人が、恐らくオウム教のなかで行われたように何人も或いは何十人にも及ぶということも無かったんでしょう。それは計画的なことというよりは極めて偶発的な出来事であったわけなんですね。いずれにせよその殺人事件はかなり当時のジャーナリズムを賑わしたようです。

## 6. ワイドショーのキャンペーン番組の問題点

財産収奪の面、或いは修行方法、或いは儀式に関わるセックススキャンダルの面、或いは薬物使用の面、インチキ治療だという批判、さらには殺人教団であるというキャンペーン。つまりこのように考えてみると、今、オウム真理教事件の中でジャーナリズムが使っている手法といいますか、批判の項目といいうものはすでに100年以上も前の天理教批判のキャンペーンの中で全て出ているわけです。

だからといって僕は今、オウム真理教に対する批判が冤罪であるということを言おうとしているわけじゃ全然ないんです。たぶん今のジャーナリズムのオウム真理教批判、とりわけ今あげた項目を巡るキャンペーンは一定の事実に基づいているんでしょう。といいますか、僕自身も3月22日以降、最初はそれこそ半信半疑で本当にオウムはそういうことをやったのだろうかと思っていましたが、段々とたぶんやっていたのだろうと思わざるをえないという状況が続き、さらに今は公判の中で幹部たちが「自分たちはそういうことをやっていたんだ」と言っている。

ですから承認せざるをえない状況になっているんですけども、しかし、僕が言いたいことは、もう一度繰り返せば、オウムがやっていないにもかかわらずジャーナリズムはそういう批判をしていて、それは「けしからん」ということではない。ただ、もしオウムがやっていなかつたとしてもやはり日本のジャーナリズムはこれらの項目をもって今回の事件のキャンペーンに関わったのではないかと思うのです。

何故かといいますと、いちばん最初の強制捜査が始まって、とりわけこれはテレビに関してなんですけれども、ワイドショーで次々にオウム真理教がこれまで撮り溜めてきたビ

デオを盛んに画面に登場させながらキャンペーン番組を作ったときに、これらの要素が早くも出てきたからなんですね。その時点ではまだ、誰もが眉に唾を付けていた。そんな事実が本当にあるだろうかっていうような状況であったにもかかわらず、テレビのワイドショー的なキャンペーンのなかではこれらの要素が既に暗示されていた。上佑だとか村井だとかが出てきて、それに対して「いや、自分たちはやっていない」という反論のコメントをしていたその時期だったんですね。その時期に既にジャーナリズムは確証のないまま、まるで事実であるかのようにバッシングを展開していたっていうことになります。

僕はそれで「いや、これは違うんじゃないかな。これはまずいんじゃないかな」と思って、何とか反証の材料を探そうと思って、上佑や村井に盛んに会いに行ったりっていう時期があります。でも残念ながら出てくる事実はむしろそのいささか先走ったジャーナリズム伝統の手法である宗教バッシングに、見事にかなるような材料ばかりという、無残な結果になってしまったんですけども……。そういう意味では僕らは出来るだけ公平に、つまりまだオウム教が犯人だと決まったわけではないのだから、彼らに反論の場を与えようと考えました。「彼らは反論しているんだから、彼らが提出している材料を使って記事を書いて少しバランスをとらなければ、なんば何でもおかしいんじゃないかな」という、いわゆる良心的な作業というものは全く報われなかったわけですけれどね。そういう意味では最初っからスキャンダルジャーナリズムのほうがむしろ当たっていたという、笑うに笑えないというか。そういう誰もが想像することのできなかつた凄まじい現実が展開してしまったわけなんですね。

## 7. ジャーナリズムにおける「隠す機能」という重要問題

それで、僕の話はまだこれから続くんです。どういうかたちで続くかって言いますと、しかし今回のジャーナリズムの問題はそこに無いのではないか、本当に重要な問題は実はそこには無いのではないかっていうのが僕が言いたいことなんです。

今までの所ですと普通のジャーナリズム批判の枠で、方法論として十分に日本に蓄積はあるのだろうと思います。しかし宗教とジャーナリズムに関して、まだジャーナリズムの側も或いはジャーナリズム批判の側も準備が無くて、それから先はまだ僕自身も試行錯誤なんですけれども。実はもっと大きな問題がジャーナリズムと宗教との間にはあるのではないかということを天理教と明治のジャーナリズムの関係を探る中で気が付いたんです。それはどういうことかといいますとジャーナリズムは単に人権を侵害してスキャンダラスな情報を冤罪である人に貼りつけるだけではないということです。

もちろん、例えば、松本サリン事件の時に皆さんのが良くご存じの第一発見者である人物にレッテルを貼るということにおいてジャーナリズムは見事にスキャンダルファンに応える役をやっぱり果たしてしまった。共同通信は河野義行さんに対して一番最後に謝ることになったという問題もあります。どういうことでそうなってしまったのか、共同通信も硬直した面を持っている組織なので、そういう結果になったのでしょうか。いまだに河野さんから共同通信は批判されているわけなんですね。それは当然のことだと思います。

ですが、僕はもっと大きな問題が宗教とジャーナリズムとの関係であるんじゃないかなと思っています。それはまがまがしい間違ったイメージをそうではない人物や団体に貼りつけるということではなくて、むしろ「隠す

という機能」ではないかと思っているんです。ある現象について報道するということは実は報道しないこともあります。つまり新聞の紙面もテレビの時間も限られている。ある一つの現象に関する報道をするということは裏返せば、別のこととは報道しないということになってしまうんですね。

天理教に関しては明治のジャーナリズムは教義についてはいっさい報道していないんです。天理教はどういうプロセスで中山みきに神がかかってスタートしたのか、そして神のメッセージというものはどういうものだったのか。僕は天理教に対しては、いや、天理教というよりは中山みきが神によって下ろしたメッセージに関しては非常に共感するところがあります。つまり、中山みきのメッセージの根幹は神様がこの世に人間をお作りになったのは苦しみに満ちた生活をしろということではない。そうではなくて人間に陽気暮らしをせよということだったんだというのです。陽気暮らしというのは天理教の本源的なメッセージなんですね。それは現代に通じる力を持っていると僕は思っているんです。

ところが、天理教バッシングの中ではそのような言葉は一言も紹介されていないんですね。みきはその「陽気暮らし」というキーワードに基づいて当時の社会を鋭く批判しています。当時の社会が持てるものと持たざるものとに分かれていて、彼女はそれを「高い山と低い谷底」というように表現しているんですけども、その高い山、権力を持った者と、谷底、権力を持たない「か弱い民衆」、そのように社会が二つに分裂されていることが、この世の苦しみの最大の原因なんだということを言って、彼女は「いずれその高い山というものは引っ込められてしまうぞ」とか「高い山が反省をしなければいずれ天変地異が生じて、低い山になってしまうぞ。気をつけよ」という警告を発しているんですね。ある種の終末論、まあオウム真理教にもつながりかね

ない宿命を持ったその中山みきの終末論的な予言についても当時のジャーナリズムは一切報道していません。

そのようにジャーナリズムの持っている「隠すという機能」といいますか、それが今回のオウム真理教事件の中にも貫かれていると僕は思っているんです。例えば、麻原彰晃なる人物に関してどういうイメージで報道されてきたかを考えれば、このことは分かると思うんですね。吉本隆明という日本の戦後思想の最後の巨人と言える思想家がいます。戦後いち早く文学者の戦争責任をテーマに文学批評を開始し、その後も親鸞の思想などを通じて日本の思想のあるべき姿を追求してきた人物ですけれども、麻原教祖に関して彼は「私は高く評価する」と言っていますし、「彼の修行の到達したレベルというのは並大抵のものではないと自分は言い切れる」とまで言っています。吉本隆明が登場した産経新聞のインタビューはたいへん大きな反響を呼びました。もちろん否定的な反響が強かったわけですねけれども。

また皆さんよく名前をご存じだと思いませんけれども、宗教学者の中沢新一という人がいます。彼はチベット密教の研究者ですけれども、二度、麻原彰晃とインタビューしたことがあって、そのインタビューの感想を交えながら「麻原彰晃は高い意識状態を経験している人だ」と述べています。或いは彼の宗教思想の中には宗教思想が本来持たなければいけない本質的な面が宿っていたんだということを今に至るまで言っているわけです。

他方ではこうした吉本や中沢らの対極として、とりわけジャーナリズムを通じて「麻原は宗教者でも何でもない。単なる詐欺師であって、極刑に値する犯罪者でしかないんだ。彼を宗教者として扱うなんてとんでもないんだ」というメッセージも流されているわけです。

僕はやはり両方の面を持っているのが麻原

なんだろうなと思います。そう考えなければ一定の知力を持ち、おそらく普通の人間以上に何か真剣にものを求める欲求と衝動に浸されていたであろう、ある意味では優れたと言えるかもしれない若者たちを何故彼が引きつけたのかが理解できないんですよね。単なる犯罪者、単なる山師がそれを引きつけたのかというその謎が、単なる山師説では決して解けない。にもかかわらず、大小説家であるところの司馬遼太郎だとか或いは優れたルポライターだと言われている猪瀬直樹などという人達は麻原を単なる犯罪者、あるいは山師としてのみ扱おうとしているわけですね。ましてや一般のジャーナリズムは麻原のメッセージの宗教的とも言えるある側面に関しては一切言及しないまま隠してきたなというように思っているんです。

## 8. 「死に直面せよ」と説き続けた麻原の鋭い一面

僕自身が麻原のメッセージの中から鋭い面を見つけることは幾らでも出来ます。それは彼の説法集を読めばすぐ出てくることです。その面を見なければ何故、麻原があれだけの教団を組織できたかが分からぬんですね。麻原のメッセージの中には例えば、イエスや仏陀が言ったのと同じような言葉がいくつも出てきます。それはイエスの場合は「私がこの世に現れたのはこの世に平和をもたらそうしてきたんじゃないんだ。みんなの中に剣を投げ込もうとしてきたんだ」ということを言っています。また同時にイエスは「予言者というのは家族のなかには入れられないんだ。家族からは理解されないのが予言者なんだ」とも言っています。麻原も全く同じことを言っているんですね。仏陀も出家ということを強く方法として考えてシステム化した人物でした。家族と対立する悟りの欲求こそが、彼の宗教の根幹になっている。つまり一般社

会からは自分の、この世の中を超脱しよう、そして解脱を求めようという欲求は受け入れられないんだという宗教と社会との本質的な対立関係についてイエスも仏陀も良くわかつていたわけですね。麻原自身が一貫して言い続けたのはそのことでした。

また今、死の問題が社会で非常に大きな問題になっています。死が日常生活の中で隠されているということが、例えば、学校において子供たちが簡単に暴力をふるったり、或いは簡単に自殺したりしてしまうことの一因となっているのではないか、死というものをもっと見つめなければいけないんじゃないかということが盛んに言われています。それはホスピスの問題だとかというようなこととも絡まっています。先進国ではどこでも死が大きなテーマになっていて教育現場でもデスマジュケーションだとかをやらなければいけないという考え方があります。

他方、日本の様々な宗教者のなかで麻原ほど、絶えず死ということをテーマにして説法を行った人はいなかったと言えます。彼は「人は死ぬ。死は避けられない」と言い続けてきました。特にここ1、2年の説法では必ず最後に「人は死ぬ。絶対に死ぬ。死は避けられない」というフレーズを何度も繰り返したんですね。彼が信者達に対して「死と直面しろ」っていうことを絶えず言い続けたのはまぎれのない事実ですし、それが信者たちにとって大きな魅力であったし、或いはこの社会が要求している無意識の欲求とでもいいますか、それに対して答える、そういう側面であったのかもしれないと思うんですね。

さらにちょっとハショッて、マインドコントロールの話になってしまいますけれども、この間、オウム真理教が薬物を使って或いは様々な修行法を使って、信者たちをマインドコントロールしてきたんだと、とにかくマインドコントロールを解かなければいけないんだということで、まさにオウム真理教の最大

の問題がマインドコントロールであるかのように盛んに語られた時期がありました。これからも語られていくだろうと思いますけれども、実は麻原彰晃自身がはるかに先にこの社会がマインドコントロールされているんだということを明し、この社会が人々をマインドコントロールしているからこそ我々はこの社会の人間をマインドコントロールしなきゃいけないんだと言い出した人物だったわけですね。

ですからジャーナリズムはオウムが信者をマインドコントロールしているんだという分析、それ自体は正しいですよね。というか麻原自身がそれを公言していることですから。つまり「私は信者をマインドコントロールするんだ」ということをはっきりといった上でやっているのが麻原なんですから。それを批判するのはある意味でたやすいことといいますか、別に分析する必要もないことなんです。けれども、それをやる限りは麻原はいったい何故それをやったかというところまで突き進まないと駄目だと思うんですね。どういうことかというと、じゃあ何故信者をマインドコントロールしたのか、という問い合わせてみるとということです。

## 9. 問題にされない今の社会のマインドコントロール

オウムがやったのは情報遮断という激しい方法です。実はこの情報遮断というのは今でもあらゆる宗教団体が修行を行うときにやっていることであって、例えば禅の道場でもやっているんですよね。先日、岐阜の或る有名な禅の道場に行ってそこでお坊さんの話を聞くことがあったんですけども、同行した宗教学者が「ここのお坊さんはオウム真理教について知っているんですか」って聞いたら、「長らくここで修行している僧侶なら知りませんよ」と答えていました。つまり、新聞も

テレビも一切読んでいないから知りませんよって言うわけです。情報遮断というのはある意味では昔から出家的形をとって一つの場所に閉じこもって修行する宗教集団にとっては常識な方法であるわけです。それは別にオウムの特殊のやり方でも何でもないわけです。もちろんオウムほど激しく面会に来る人間に会わせないということまで果してどこまで現代の教団がやっているかという点は別ですけども、しかしあつてはたぶんインドでも中国でも佛教教団はそれをやったんじゃないでしょうか。

オウムの情報遮断の厳しさをジャーナリズムはある観点からしか書かなかったと思います。つまり、そのような情報遮断を通じた激しいマインドコントロールは麻原の言い分からするならば、この社会が学校教育や消費社会の広告といった文明の装置を通じて人々を一定の意識の方向に追い込んでいるからこそ必要だということになる。麻原の言い分からするならば、今の社会からの解脱を求めるためにはその情報をいったん遮断したうえで、別のマインドコントロールを受けなければそこから解脱できないんだよということになります。麻原自身の理屈はそれはそれとしてあるわけです。ですから麻原のマインドコントロールを批判するためには、その出てきた発想の根拠であるところのこの社会のマインドコントロールに関しても、ジャーナリズムはもっと敏感でなければいけなかつたと思うのです。

実はオウム真理教事件が発生する以前はジャーナリズムにおいても、そのような発言は少なくなかったし、まして様々な学者や知識人の間ではこの社会のマインドコントロールの最たるもののは学校教育なんだっていうことについては、常識であったと思うんですね。或いは広告に関してはそのようなマインドコントロール批判という視点からの広告批評或いは広告批判の文献というのは翻訳を中心に

幾つもあると思います。

しかし、この事件が起きてからはとりわけテレビのコメントーターたちは一切そういうことに言及せずに、ただただひたすらオウム真理教を批判する状況が展開されたわけですね。それについても僕は、皮肉っぽく言えば、ジャーナリズムの「隠す機能」の一つとして考えることができると言いたいですね。この機能はそれ自体が一つの社会的なマインドコントロール論の対象として取り出して論じてもいいくらいのものなんじゃないかなあというように思っているんです。

## 10. 破防法適用をめぐる議論の不可解さ

ちょっと話が長くなってしまったので、またぞろちょっと飛躍しなきゃいけないんですけれども、ついにオウム真理教に対して破防法が適用、まだ適用されたわけじゃなくて適用のステップに入ったということですね。この破防法の問題はこれだけだけでも何時間も議論しなければいけないような様々な問題を孕んでいます。果して破防法が合憲、つまり憲法に合致した法律なのか或いは違憲のかっていう問題もあります。僕は明らかに違憲の性格が強いと考えています。

でもその議論は議論としてここ数日、破防法を巡る報道が続いているわけなんですけれども、その中でやはり気になる点がいくつもあります。違憲の要素が強いんじゃないかということも関わることなんですが、破防法の適用の手続きに入ったというその説明がですね、ジャーナリストも本当のところで全然詰め切れていないし、記者会見でも全然追求できていない、また法務省や公安調査庁も最初からほとんど説明する気が無い。或いはこの国においてはその説明を引き出す場所も方法も装置も何ら確立していないということが明らかになったんじゃないかなと思いま

す。

アメリカの議会ではオウム真理教事件で公聴会が開かれて、そこでは100ページにもわたる調査報告書が公表されていますね。100ページにもわたる報告書を出して公聴会を開いた、そして情報を公開しようとした国と、ほとんど通り一遍の報告を読み上げて、そして「議論は十分尽くしましたから」といって、破防法の手続きに入る国とのこの落差と言うのは何なんだろう。僕はジャーナリズムはその事実をこそつくべきだと思います。残念ながら僕は今は、評論を書ける場所にはいませんので書くことが出来なかったんですけども、僕が書くとしたらそれを書くしかないだろうなというように思っています。

つまり破防法の適用条件のなかに、例えば政治的な目的で破壊活動を行うということはあるんですけども、今回の公安調査庁の報告によても政治的な目的というものは非常に曖昧で、明確には語られていないんです。それで、もしかしたら村山首相は裏で別の情報の提供を受けて、最終的に決断したのではないかと僕は勘ぐっているんですね。新聞で発表された公安調査庁の報告を読んでもですね。一番眼目になっているのが松本サリン事件でサリンをばらまいた、要するにオウム王国を作ろうとした活動に対して敵対し、反発した市民を殺そうとしたんだということです。或いは裁判官を殺そうとしたんだと、だから政治的目的があるんだということになっているんですね。しかし公安調査庁の報告では今なお麻原に帰依し忠誠を誓っている出家信者が八百人、その他多数の在家信者がいると書いてあったと思うんですが、非常に過大に報告している気配が濃厚なんです。

それはさておき、例えば以前の出家が五千、在家が一万という一万五千人の部隊を全国に散らばらせ、それでそれぞれの部隊がサリンを持って、或いは一千丁の自動小銃を持って決起したとしても果してハルマゲドンを起こ

して、そして政権を乗っ取ることができるか。果してそういうことを彼らが真面目に考えていたのかっていう問題を立てますと、非常に馬鹿らしい。ほとんどリアリティーを持たないのではないかという結論しか公安調査庁の報告を読んでも浮かび上がってこないんです。

となると、もはやリストラでほとんど潰されかかっている公安調査庁が生き延びるためにオウム真理教の実態を大袈裟に偽造し、ほとんどでっち上げ的に理由を作り上げて破防法を適用しようとしているのか、或いは我々が知らない別の情報があって、それは首相まで伝わっているけれども一般には公表されない形で、しかし証拠は既にちゃんと掴まれていて、そして破防法が適用されようとしているのか、いったいどちらなんだという謎が出て来るんです。それに関しては全くジャーナリストは追求できないし、記者会見で追求しようともしていないんですね。

一方でこのオウム真理教の事件を巡っては無数の噂が存在しています。それは初期からあることなんですけれども、オウム真理教だけでクーデター的なことを起こして日本国家権力を奪取しようとしていたのか、或いは別の国が関わっていたのかということです。それに関しては「いや、オウムだけでは最初の一斉蜂起をすることが出来るだけであって、その混乱に乗じて別の外国勢力が介入して来なければ、とても目的が達せないはずだ」ということが語られていました。その別の国というのはロシアからの傭兵軍団であるとか或いは早川が何度もそれこそ21回でしたか、北朝鮮に行ってきた、その過程で北朝鮮の何処かの軍事のある部分と交渉が行われていたのではないか。その気配があるんだというようなことも語られてきているわけですね。つまりそれらを単に根も葉もない話として無視していいのか、或いはもう少しちゃんと調査、分析を進めなければいけないのかっていうこ

とすら僕らは議論に出来ていません。

その問題について新聞ジャーナリズムとテレビはほとんどノータッチです。ただ雑誌において少しフリーのジャーナリスト達がアプローチしている。今のジャーナリズムまたはマスメディアといつても一律には語れなくて、テレビのジャーナリズムが先頭を走っているとすれば、雑誌ジャーナリズムは独自の報道の領域を担い、そして一番つまらなくて面白くなくて遅れているのが新聞ジャーナリズムであり、そして一番「隠す機能」を果たしているのが新聞ジャーナリズムじゃないかと僕は思っているんですけども。このオウム真理教事件においても或いは破防法適用の問題を巡っても、この後に及んで破防法をなぜ適用するのかを巡って本来、主張すべき情報公開の要求を僕らジャーナリズムは全くやっていないわけです。

## 11. ヴァジラヤーナの教義と「ポア」

そろそろまとめに入りたいと思っているんですけども、そういう中で公安調査庁は破防法適用の理由の一つによくオウムの教義の問題を出してきました。教義の問題は僕は3月の強制捜査の時からこれが一番重要なってくるだろうというように思っていたんです。

にもかかわらず新聞ジャーナリズムは、これまで教義内容にほとんど触れないできたわけです。先程の天理教の時と全く同じです。しかしながら、実はオウム真理教には、ヴァジラヤーナ（秘密金剛乗）という教えがあって「殺人を行っても救済になる」或いは「仏敵を殺したとしてもそれは悪業を積もうとしている人間を殺すのだから、むしろ善業なんだ」という教えを含んでいるのです。

オウム真理教の場合はそれを同時に「ポア」と呼んでいたということまでは最近、新聞ジャーナリズムに出てくるんですね。僕が一番最初、ヴァジラヤーナの教えがオウムの中

にあるということを聞いたときにピンと来たのは、これはオウムの教えだけじゃないだろうということでした。僕の記憶のどこかにあったんですね。つまり仏教というのは決して一般に考えられているほど絶対平和主義の宗教ではなくて、密教系の仏教の經典の中に無数に仏敵を殺すことは善業になるんだ、仏敵を殺しても悪ではないんだという言葉が出てくるんです。だからそれはオウムの専売特許でも何でもなくて、実は仏教というのはそもそもそういう經典を持った教えなわけなんですね。

僕の記憶のどこかにあったんだろうと思いますね。だからいろいろと調べてみて、かなり早くからオウムのなかでヴァジラヤーナという教えが教えられていて、それに関する説法だけを集めた「ヴァジラヤーナ教本」というのがあり、テープもあるということについては知っていました。オウムの信者のなかに「オウムの教えをあなたに知ってもらいたいから」という名目で僕にその「ヴァジラヤーナ教本」を5月の初めぐらいの段階で手渡してくれた信者がいました。ただ僕はすぐさま鬼の首を取ったように、それに基づいてオウムが殺人を行ったんだということを（テレビで江川紹子さんがやったように）ストレートに記事にするということが出来なかったんですね。おそらく社会部だと他の部の記者の手に渡っていればそうなっただろうと思います。それはいわゆる「特ダネ」としてかなりスキャンダラスに扱われただろうと思いますね。

僕はそうしたくなかったんです。なにしろ麻原自身が「やってない、私は無実だ」と言い続けているわけですから。彼がそう言い続ける限りはそれを無視して決めつけることをしたくないということがあってやっぱりやれなかったんですね。でも、その後の様々な状況的な証拠だとか証言だとかを見るとやはり「ヴァジラヤーナ教本」というのが、今回のオ

ウム事件においてかなり大きな根拠の一つになっているのは間違いないだろうと、今は思っているんです。

その教本を得る少し前ぐらいからですが、やはりこの問題をちょっと考えてみようということで、チベット密教の専門家だとか或いはインドに伝わるタントラ仏教の研究者に会うということをしました。チベット密教の学者は意外にもあっさりと「あるんですよ。実はそれは日本にも伝わっているんですよ」ということを何の抵抗もなく認めましたね。どんな形かというと麻原の「ポア」ではないんです。「ポア」という儀式それ自体はチベット密教の中にあって、それは生者や死者を問わずその人の魂をより高い地平へ引き上げるための儀式なんです。ところがそれを殺すっていうことにしてしまったのは麻原です。

チベット密教の「ポア」とはあくまでも清浄な儀式の名前であって、殺人儀式の名前ではないんです。じゃあ何があるかというと「ドル」っていう言葉があるわけですね。「ドル」は「救済」という意味ですが、高野山あたりでは「度脱」という翻訳で伝わっています。度脱の度というのは済度の度だと、それから脱は解脱の脱だと聞きました。じゃあ度脱とは何かというと「それこそまさに麻原の言うとおりのものですよ」と宗教学者は言うわけです。実は真言密教では坊さんは一貫して仏敵、或いは高野山に帰依する朝廷の怨敵を退散させる。怨敵を退散あるいは殺すための祈りを捧げてきたのです。高野山はそうやってきた。ましてやインドの仏教はイスラム教との戦争によって滅んでいくわけなんですけれども、そのイスラムと対峙せざるを得なかつた佛教徒たちが戦争をある面で肯定し、人を殺すことを肯定するための教義を当然の如く作り出してきたというのが事実です。というわけで、それをまとめた典型的な經典が「カラチャクラタントラ」と言われているのです。「カラチャクラタントラ」は「時輪タン

トラ」というようにも翻訳されていて研究書も日本にあります。

僕が会ったのはその研究書を書いた人なんですけれども、チベットにはその「カラチャクラタントラ」があります。それはどういうお経かと言いますと世界最終戦争が語られているお経なんですね。仏教を信仰し、シャンバラという理想郷を管理する聖なるルドラチャクリンっていう王がいるわけですけれども、そのルドラチャクリンが蛮族の王と戦って勝利し、全世界を仏教の王国にするということが書いてあるんです。その中にヴァジラ族というのが重要な存在として出てきて、そのヴァジラ族は人を殺すべきであるという教えが出てくるらしいですね。

ダライラマは世界各地で「カラチャクラタントラ」の儀式を行っています。これは今も生きている經典です。オウム真理教が「カラチャクラタントラ」の最終戦争と自分たちの行動とを重ね合わせていたことははっきりしています。お手元の資料をご覧下さい。94年12月発行の機関誌『ヴァジラヤーナ・サッチャ』のNO.5「特集・戦慄の世紀末予言」に「隠された王国が出現する！——秘境チベット・シャンバラ大予言」と題して、カラチャクラ伝説のダイジェスト版が掲載されています。機関誌『ヴァジラヤーナ・サッチャ』は、94年8月に創刊されたのですが、早々と松本サリン事件の小説を連載したり、自らの行動の手の内をさらけ出したような不気味な面があります。誰が編集していたのか非常に関心があるので、このシャンバラ王の最終戦争伝説の縮小版の文章にしても極めて質の高いものです。ルドラチャクリン王が蛮族の王を打ち破ってシャンバラの世界化を実現する。その中に次のやりとりが挿入されています。

「戦いが済んだとき、勝利に歓喜するシャンバラ軍の中で若い兵士がポツリと言った。『確かに我々は勝利したが、……私は多くの殺生

をし、仏教の戒律を破ってしまった……。それを聞いた別の兵士が言った。『心配するな。この戦いは祝福された戦いであり、この戦いで死んだものは蛮族といえども、いや小鳥や昆虫に至るまで、ポワによって生まれ変わるものだ。』若い兵士は清浄な天眼によって実際に彼らが高い世界へと誘われていくのを見、すべてを理解した。』

宗教学者によれば、このようなプロットは元のタントラにはないということなんです。つまり、この文章を書いたオウム信者の脚色の部分なんです。しかし、ポワの語義を拡張し、歪曲しているとしても、この箇所が「カラチャクラタントラ」の全体の趣旨から逸脱したものだとは言えない、とその学者は言っています。

ここにはポストモダンの能天気な日本においては決して見えて来ない、また江戸の幕藩体制の管理された徳川の平和からも見えてこない「戦闘する仏教」の側面が現れているということでしょう。それを麻原は極めて不用意に理不尽に現代に解き放った。その条件の必然性の感じられないところで性急にボタンを押してしまった。ボタンを押したことによる疑惑と非難が集中すべきだとしても、ボタン自体は、仏教の水脈の底に沈んでいたわけです。

(注) 95年12月20日付で刊行された『ドラマの密教入門——秘密の時輪タントラ灌頂(イニシエーション)を公開する』(光文社)には「金剛の一族に属する者は殺生を行なうべきである……』という一見、破戒的な誓いの言葉が引用され、「前述の言葉は『仮の意味』(未了義)と『本当の意味』(了義)の二通りの仕方で解釈することができます」と解説されている。「仮の意味」とは「他の手段ではどうにもならない場合において教えに害をなしているもの、命ある者を憎むもの、忌まわしい悪行をまさになそうとしているものなどを慈悲に動かされて殺すことができる」。「本当

の意味」とは修行法上の暗喩として、大樂を阻む射精をもたらす「風(ルン)」の命をとるべきことを意味しているという。ここで注目すべきは、了義によって未了義が否定されているわけではないことである。

そのようなことがありまして、「ポア」自体が麻原の造語であったとしても、しかし、彼が自らの行動のために口実として使った教えは決して彼自身の妄想ではなくて、或る種の仏教の伝統のなかに根づいている事柄なのだとということに関しては、僕はやはり無視できないだろうと思っているんです。それを知ることによってこのオウム真理教事件の広がり、仏教の持っている闇の歴史というものを知ることが出来るし、またオウム真理教事件をもっと広いパースペクティヴで捉えられると思います。

オウム真理教事件というものを人間性のおぞましさというか人間が作り上げてきた歴史のおぞましさ全体の中で捉え直すのは意味のあることだと思うのです。単なる偶然の問題としてではなくて、人間は崇高な大義や目的を掲げてさまざまに悲惨な事件や残酷な事件や生命を奪い、蹂躪する見るも無残な出来事を繰り返しているわけですよね。たった今もそんな現象が起きているわけです。そして今回のオウム真理教事件ももちろんその一つですけれども、それは決して例外的なことではなくて非常に歴史に根ざしている出来事であるし、文明の中からまさに膾のようにじみ出て来ているものです。それを単に麻原個人が山師だから、単に彼は特異な犯罪者だからというような個人的なところに還元するっていうことによっては決してオウム真理教事件というものを理解できないのだろうと思います。

## 12. 犯罪を個人の資質に還元して理解する方法の誤り

ジャーナリズムの戦後の歴史の中で、やはり傾向として多かったのは犯罪を彼個人の資質に還元して理解するという方法です。犯罪心理学者という人達もほとんどその手法で理解しようとしているわけです。例えば福島章さんだとかいうような人々がそうです。彼らが書く文章、特に福島章さんが最近書いた文章などは、オウム真理教事件は社会が生み出したという発想が盛んに新聞に書き立てられているけれども、そんなことは全く無いんだ、これは特異な人間が生み出した特異な犯罪なんだということを言っているわけですね。

確かにジャーナリズムは、今言ったように一つはその個人の特異なキャラクターというところに犯罪を還元していくという手法をとってきました。それとまた裏返しにこのオウム真理教事件を社会が生み出したものとして捉える立場もあります。ちょうど裏返しのような二つの分析の流れがあるんじゃないかなと思います。

ここで最初の話に戻れば、僕はやはりもう少し複雑に複雑性を複雑性として捉える方法論というものがいかなる領域でも練り上げられるべきだと思っているんです。もちろん単にジャーナリズムだけではなくて、こちらの研究会の社会情報調査の方法という問題とも関わってくるのではないでしょうか。

この世界の様々な出来事あるいは個人そのものも非常に複雑です。個人こそまさに無数の網の目によって重層的に作り上げられている。まさに重層的な存在、或いは多元宇宙というものを抱え込んでいるもの。多元宇宙の多元性というものそれぞれの可能性をどの様に開花させていくのかということが人生だし、それは文化や文明の問題でもあります。また、こういう大学、教育という文化装置の

目的もあると思うんですね。それを抱え込んだその多層な自分自身の中の宇宙、それは場合によってはとても素晴らしい事をするし、また、場合によってはとんでもない人類のおぞましい闇の歴史の古層から吹き出してくるような実に残虐なこともしてしまうんですね。

麻原彰晃という一人の人物の中にも多数の層があったと思うんです。それをどこか一つに還元するのではなくて、彼の最高の部分は最高の部分として素直に認めるべきだと思うんです。つまり原始仏教の或いはイエスのその言葉と響き合うような文明批評家としての麻原は確かに存在していたと思うんです。その点を僕は無視したくはない。彼はいろいろな可能性を持っていた。にもかかわらず彼のどこかの層には凄まじい怨念、ルサンチマンがあった。これは井上さんから後でお話を頂けるんじゃないかなと思っているんですけども、そういうルサンチマンの問題はたいへん気になります。

それが今、消費社会と言われているこの爛熟した、そして何かこう方向性を失ってしまったこの日本の精神状況を切り裂くような形で出てきてしまったという、そのことの意味を僕はさらに考えていきたいと思っているんです。それは同時に僕のようなジャーナリズムの場に身を置く人間がさらにそれを内側からどの様に変えていくかという課題にもつながっていくでしょう。こういう場で皆さんにお話を聞いて、さまざまリアクションを頂いてまたそれを豊かにしていきたいなというように思っています。あまりまとまらない話になりましたけれども、質問をいただいてさらにこの場でいろいろと議論を続けていければありがたいと思います。